

〔中小企業の目〕（徳島）

パNST屋の医療機器

佐藤 允 男
（東光株式会社）
代表取締役社長



戦後間もない昭和21年、この東光は私の父 佐藤成俊によって創業されました。当時、アメリカに敗れた若い経営者は、皆同じように焼け野原の日本で如何に家族を食べさせるのか、如何に国を立ち直らせ生活を安定させることができるのかということ、悩み、苦しみ、そしてそれぞれが自分の生きる道を模索したそうです。結果、この経済の国「日本」が誕生しました。

それから二十数年ほどして、私は、商社勤務を経て東光に帰ってまいりました。帰ってきた私にパNST屋の父は口癖のように言いました。「会社は品質だ。コストだ。」と。「そうすれば、会社は生き残ることができるから。」とも。当時、25歳の私は父によく反発して、「いくら品質が優れても、いくら安くても、このモノがあふれている日本では、消費者のニーズが湧かない」と。結果、こっぴどく叱られることになりましたが…。

繊維産業の起こりは、イギリス、そしてアメリカ、日本へと移り変わっていき、その後、コスト安でマス生産の得意な国へと流れていきました。すなわち、日本から韓国、中国へ流れていくのは当然のことというのが私の考えでした。繊維生産は大変ファジーなものであります。メリヤスは漢字で書くと「莫大小」と書くように、大変アバウトな商品でありますので、工場内の品質管理は、当然の如く生産性を高めるためのものに留まっておりました。このような中、私は会社方針を「パNST屋が医療機器製品を作る」に方針転換しました。そのため、品質管理委員会、開発委員会、提案審査委員会、ISO推進委員会を発足し、全員参加型で社員の考え方を換え、ボトムアップを図りました。結果、平成13年にはISO9001、平成17年には医療機器製造業、平成19年には医療機器製造販売業の許可を取得できました。また、平成12年には、(株)メディックスを立ち上げ、自社の医療機器ブランド販売を開始しました。販売体質もOEMから自販マイブランド販売にバランスを取りながら少しずつ変更していきました。

近いうちにTPPが結ばれ、日本でも海外との競争が厳しくなることが予想されます。その中で、パンスト屋でありながら医療機器の世界に足を突っ込んだ東光が生き抜いていくには、私が東光に帰ってきた時の父の言葉「品質だ。コストだ。」が、紆余曲折の果てに、どうやら会社の基盤になりそうです。

今、日本の品質基準がJIS法、JAS法等、いろいろな基準の下で、食物をはじめ多くの製品・産物が護られています。が、残念ながら、不十分なところが多々あるのが現状です。また、繊維産業の中でも「J ∞ QUALITY」を推し進めようとしています。このような背景の中で、我々日本のモノづくりに携わる人達が考えなければならないのは、この日本の品質基準というものが世界のメーカーの人達の間で、お金を払ってでも守ろうとしなければならない、財産のような品質基準を作ることが大事だということ、そして、その品質基準が確立するまでは、世界で現在中心となっている品質基準をどう重視し、自社で取り入れて運用していくかという方向性を取るべきであるということです。

大変ファジーでアバウトな生産をしているパンスト屋の世界で育った東光が、薬機法などの国の法律に縛られる医療機器という真逆な世界の中で、自社の独自のやり方、生き方を見つめながら、中小企業でありながらも日本のいや世界の皆様に期待をされるようなモノづくりの会社として進みたいと思っています。